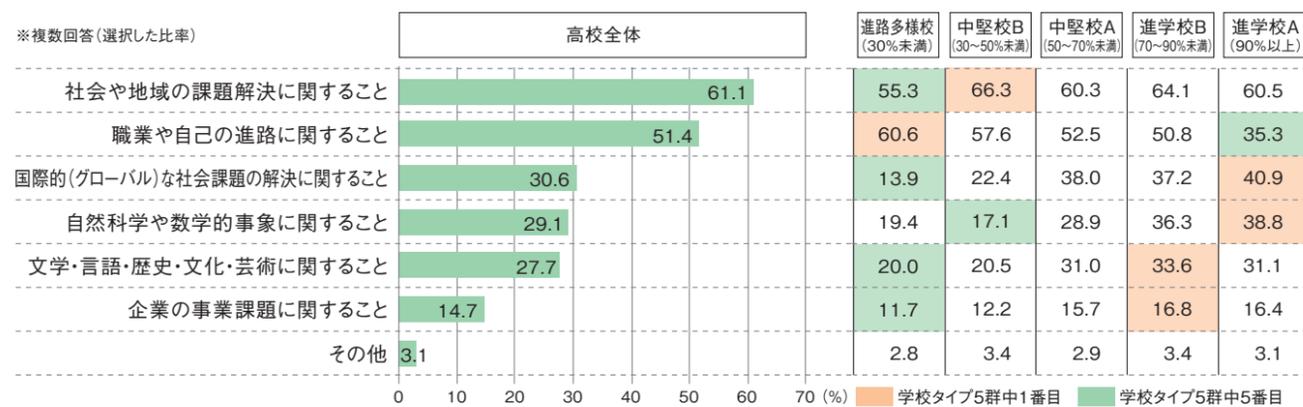
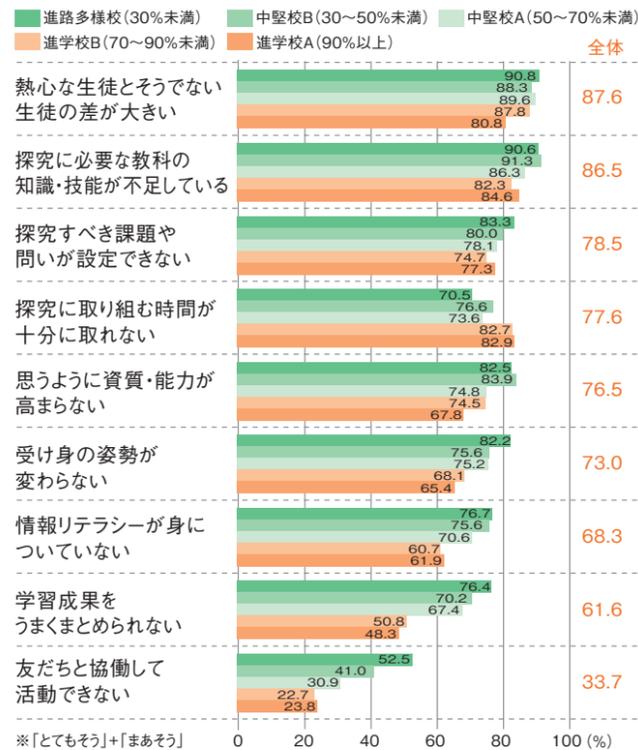


【図表3】探究活動のテーマ(全体および学校タイプ別)

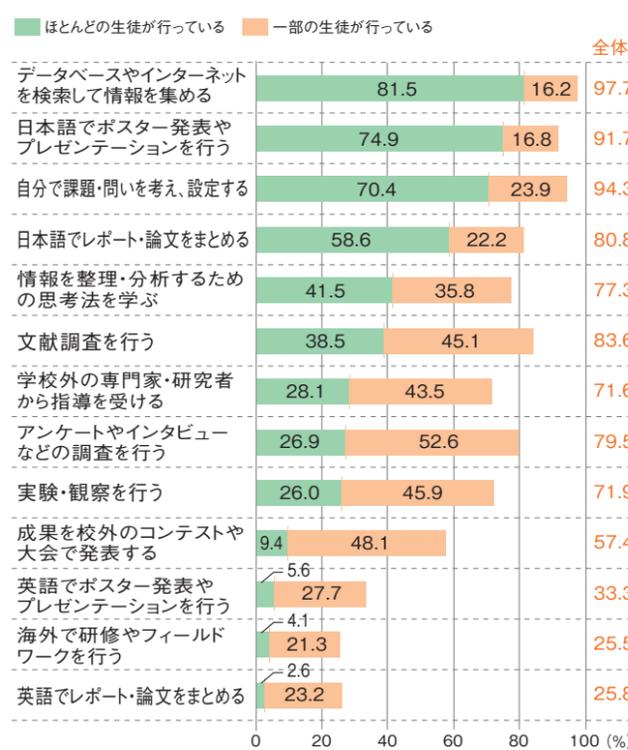


※【図表3~5】「小中高校の学習指導に関する調査2022」ベネッセ教育総合研究所 (全国の国公私立高等学校教員対象。n数=3,153。2022年8月末~9月中旬実施)

【図表5】探究活動における生徒の課題(学校タイプ別)



【図表4】生徒が取り組む探究活動の内容



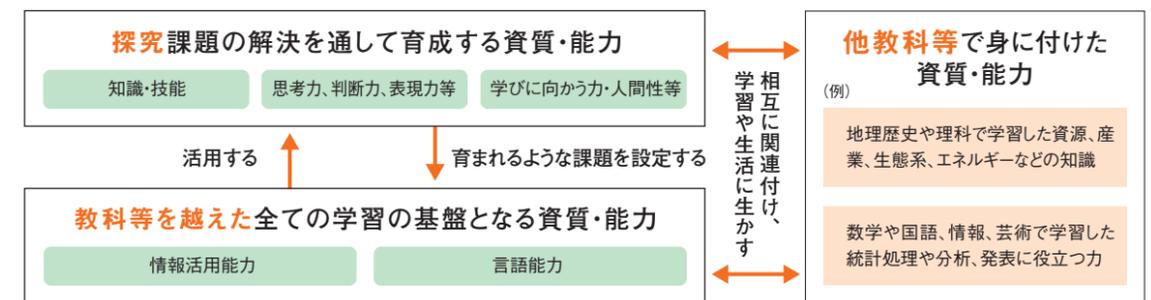
「社会や地域の課題解決」が最も多い。2番目の「職業や自己の進路」は、特に進路多様校で設定されるケースが多く見られる。一方、「国際的な社会課題の解決」「自然科学や数学的事象」は進学校で設定される傾向が強い。連携先を考えるうえで参考にしたい。

活動内容はどうか【図表4】。情報収集や発表は多くの高校で取り組まれているが、「学校外の専門家・研究者から指導を受ける」「アンケートやインタビューなどの調査を行う」「実験・観察を行う」「成果を校外のコンテストや大会で発表する」といった活動は十分に行われているとはいえない。こうした活動は、まさに大学が支援しやすいことであり、高校の期待も高い(P. 18)。

探究活動における生徒の課題を見ると【図表5】、「知識・技能不足」もさることながら、「生徒間の意欲の差」「問いを設定」「受け身の姿勢」が、特に中堅・多様校で顕著だ。まずは高校生の興味に応じた探究プログラムを提供し、問いづくりより先に、探究学習そのものへの意欲をかき立てる工夫が求められる。桜美林大学の探究学習支援プログラム「ディスカバー！」(P. 21)は、まさにそうした好例と言える。

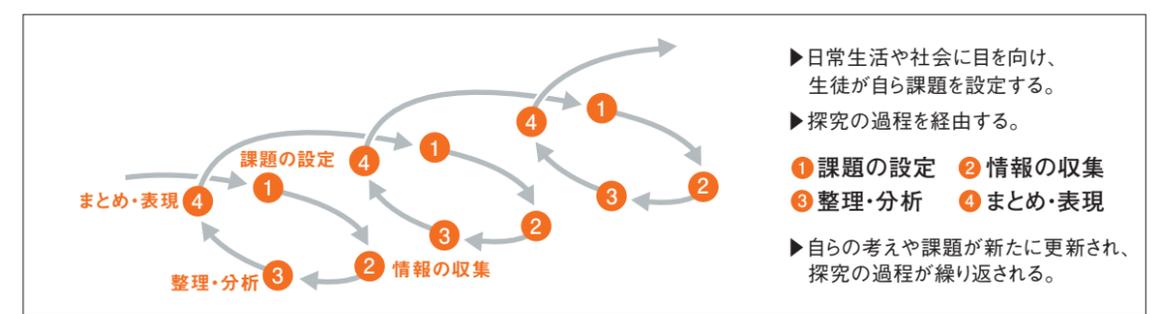
高大接続2 探究学習でつながる

【図表1】探究と他の学習の関連



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部にて作成

【図表2】探究における生徒の学習の姿



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部にて作成

教科書のない探究学習 高校教員間で温度差が

高校では、2022年度から「総合的な学習の時間」を改め、生徒自身が主体的に課題を設定し探究する必修科目「総合的な探究の時間(以下、総合的探究)」が始まった。社会に必要な資質・能力の養成に加え、自己の興味・関心に基づいた学習を通して学びへの意欲を高める効果も期待される。その一方で、教科書もなく、高校内だけでは探究の題材となるようなリソースが限られていることもあり、授業の設計や運営に悩む高校は多い。大学の教育リソースを活用して支援することは、高校教育との接続を強化し、若者の学びへの意欲向上に資するという点で大きな意義があるだろう。

より有効な支援につなげるために、まず高校での探究の実施状況と現状の課題を確認していく。

総合的探究では、生徒が興味・関心を掘り下げ、さまざまな視点から自分と社会とのつながりを考察する。同時に、他教科での学びと探究の学びを相互に関連付けながら、日々の学習や生活に生かすことが求められている【図表1】。多くの高校では、3年間を通して週1回、「総合的な探究の時間」

を設定。この時間で大きなテーマの探究に取り組み、そこで得た気づきや課題を小さな探究として、各教科の学びの中で進めている。総合的探究は弾力的に取り組めるため、高校間で温度差があるものの、熱心な高校では工夫を凝らした多様な探究学習が展開され、成果が出つつある(P. 18)。ただし教科の授業にどう探究的な学びを取り入れていくかは、各教員の裁量に任されているのが実情だ。

どんな探究学習であれ、探究は「日常生活や社会に課題を見つけ、解決に向かって情報を整理してまとめ、そこから新たな課題を見つけて解決に向け行動すること」を発展的に繰り返すため【図表2】、出発点となる「問いづくり」が重要だ。しかし、本来、大学の卒業論文で求められるような「問い」を自ら立てられる生徒はごくわずかで、その指導法の確立が課題になっている。

高校の課題を見極めて ニーズに合った連携を

探究をサポートする際、高校の実情に合った形を考える必要がある。【図表3】は探究のテーマを調査した結果だ。高校全体で見ると

探究学習の現状と課題